蘭越町課題解決への道筋

～移住定住ネットとは～

諸橋祥（北海学園大学法学部2年）

高橋尚大（北海学園大学法学部1年）

皆さんは、蘭越町という町をご存知だろうか。この町は、北海道磯谷郡、後志管内に存在する。「らんこし米」と呼ばれるお米のブランドが有名であり、豪雪地帯にも指定されている。あたりを見渡せば雪化粧した山々がそびえ立ち、情緒豊かな温泉施設が町内周辺に点在し、冬だけでなく四季折々の美しさを見せるという。そんな北海道らしい、大自然に囲まれた蘭越には、「移住定住ネット」と呼ばれる蘭越町で生まれ育った方、別の土地から移住された方同士が交流、情報交換、移住支援等ができる場づくりを目指した団体が昨年３月に設立された。現在会員は１４名（２０１３年１１月現在）となっており、移住・定住の受け入れをより促進する制度の検討を行い、住民の交流の場というだけではない役割を担っている。北海道の農村部において若者の流失による人口減少は蘭越に限った問題ではないが、対策として蘭越には移住・定住を促進するための制度がかなり整備されている。それには、移住定住ネットとほぼ同時期の４月

から施行された「蘭越町定住促進条例」の存在によるものだ。この条例は、蘭越町のマイホーム建築を促進する事業や新規就農者に向けた支援、定住を確約した者への住宅地貸付、そうして制度を利用しやってきた移住者に歓迎米を贈呈するなど、この他以外にも促進事業は多岐にわたり支援を進めている。今後、移住定住ネットの活動次第ではより良い事業が展開されていくと期待されている。

＊忘年会や炭火焼パーティーなどのイベントが行われている。

こうした蘭越町の取り組みを見て、より移住定住を進めていくにはこの「移住定住ネット」の普及が鍵になっていくと感じ、町民の方々だけでなくより多くの人にその存在を知ってもらうため、今回は移住定住ネットの会員６名にお話を伺い、今後移住定住を促進に必要なもの、定住者の増加に向けての考え、蘭越に対する想いをお聞きし、紹介していく。

まず初めは、移住定住ネットの会長を務める谷内宏氏にインタビューさせていただいた。町のふれあい定住住宅地貸付事業を利用し移住されている。谷内氏は仕事の関係で大阪や東京を巡り、北海道もまた転々としていた。定年退職も近づき、そんな時にセカンドライフとして住むことに決めたのが、ここ蘭越だった。

蘭越へ来た一番の理由は定住住宅地貸付事業という土地の無料開放制度であったという。谷内氏は釣りが大の趣味であり、釣りが出来る豊かな自然があることも蘭越への移住を後押しさせた。蘭越の自慢は温泉と山であり、特に温泉は足繁く利用していると語ってくれた。空いた時間に畑仕事も行っており、のんびりと悠々自適に生活している。晴れた日に見る羊蹄山の景色は絶景であり、都市の喧騒を離れて自然の多い蘭越へ移住する方の気持ちがとてもよく分かる。しかし、そんな蘭越にも悩みがあり、それは雇用の確保だという。地元に雇用が無いために若者は都市へ出向き、働く職場が減少し、それよってまた雇用が無くなるという悪循環を生みだしている。蘭越を活気づけるだめには、この悪循環をどうにかして無くさなければならない。谷内氏は、「蘭越に若い人が来るには住民の外に向けた呼び込みが大事であり、隣町のニセコをモデルケースとし、良いところは蘭越に取り入れて、力を合わせることも大事だ」と語ってくれた。

＊釣りが趣味である谷内氏。釣り歴は４０の年以上のベテランである。町の老人会などにも参加し町民と交流する機会は多い。移住定住ネット会長。

二人目は町のトマト新規就農の研修生に応募し移住した金黒光氏にインタビューを行った。金黒氏は中学まで岩内町で生活しており、高校は札幌の工業高校へ進学した。その後東京で不動産会社に就職するも、農業への夢を諦めきれず、会社を辞めて蘭越に移住し農業を行っている。蘭越移住の決め手は、生まれ故郷である岩内町に近く、農業をするのに向いていたからだ。青年就農給付金として国から年１５０万円、農業研修制度として町から月７５０００円の援助があるが、それだけでは生活は成り立たないため、冬は除雪のバイトをこなしながら生活している。蘭越の良いところは「静かで、豊かな自然が多いところ」、蘭越の改善すべきところは「特に無い」と答え、「蘭越にある豊かな自然を無くすくらいなら、無理に活気づけずに現状維持したほうが良いのではないか」と想いを語ってくれた。インタビューの最後には、「受け入れてくれた蘭越町に感謝している。住んで良かった町。ここで死ねる。」と答えてくれました。金黒氏のこうした思いが、今後の蘭越の発展に繋がっていくだろう。

次の方は町議員である熊谷雅幸氏。町の議会でも副議長を務める方も移住定住ネットには登録されている。熊谷氏は元々地元の蘭越出身であり、高校は倶知安高校に通っていた。大学進学を機に蘭越を離れ、大手保険会社に入社後、営業職などを経験し、その後、知人の議員に勧められたこともあり、その翌年に地元蘭越の議会に立候補し当選。いわゆる「U ターン」の移住者だ。議会の副議長という役職だけでなく建設資材会社の社長も務める熊谷氏からは他の方とはまた違った意見をいただくことができました。蘭越には「早く戻りたい」という気持ちが常にあったといい、議員として戻ってからは移住・定住者を迎え入れるのに必要最低限の要素と考える「除雪」、「水道」、「光ファイバー」の整備に尽力、「設備を整え定住者の確保に取り組むのは議員である以上ライフワークと思い取り組んでいる」と語る。蘭越周辺の自然に魅入られた一人であり、町の好きな点を聞くと真っ先に大自然の静けさと温泉の豊富さを挙げ、スローライフを静かに過ごしたい方にはこの地はうってつけだという。今

後更に移住定住者を取り込んで行く戦略を聞くと、移住を考えている方を対象とした蘭越町ツアーを検討しているようで、「ツアーを蘭越で開き、移住定住ネットの人たちと交流し蘭越の良さを伝え、それを移住希望者の方々が感じてくれれば嬉しい。」と答え、さらに、定住地確保に向けた中古住宅の有効活用、雇用の拡大にも取り組くむ考えだ。

＊蘭越周辺の限界集落への対応への強化も強調して訴え、具体的な対策をしなければ町は衰退していく一方だと危機感を募らせる。

次にインタビューに応じてくださったのは美容師の須藤信一氏。親戚から店を譲り受け１４年前から蘭越で美容室を経営している。

当初は親戚以外に知り合いは皆無で、事前に町の地理を調べようにもあまり詳しく公開されてないことから、かなり不安だったという。しかし、一定の顧客が確保され、安定した商売ができる上に札幌との距離も１日あれば無理なく往復できる立地から蘭越に店を出したが、今では大自然の中でスキー場も近く、温泉もあるこの土地が気に入っており、「町内会、商工会では歓迎会も開かれ、住民の気遣いもあり溶け込みやすかった」と語る。移住定住を今後進めていく鍵としては自身の経験からか、情報発信を挙げ宣伝力を高めていくことが大事と感じているようだ。「口コミで蘭越の魅力を広めていくことが大事。意外と蘭越は財政力が優秀なのでそこを活かして、いいものがあるのでもっともっと発信していけたらな、と。外から来たらもったいないと感じてしまう。」と述べ、他の市町村の例を挙げ宣伝力が

劣っている点だと主張し、さらに「道路標識も最近まで蘭越の表記があるものがなく、ニセコに蘭越の表記のある標識ができたのはほんとに何年か前。さらに蘭越周辺の地図を作り知名度を上げることができる」と、情報発信についての考えを語る。

インタビューの後半には商店街のことにも触れ、「人口減少の影響からか、活気は以前と比べると無くなってきてる。車通りも少なくなり、潰れる店もある。」と、やはり定住者の増加は不可欠なのではないかと感じた。

次に、夫のワイン作りのために新規就農し、現在は町図書館類似施設「花一会」の臨時司書を務めている松原展与氏にインタビューを行った。夫が広島で酒造会社に勤めており、小樽のワインに惹かれて小樽へ移住した。その後、おいしいワインを作りたいと思いはじめ、そんな時に蘭越に縁あって移住した。小樽には７年住み、北海道での生活は慣れていたようで、蘭越へ来る際は特に不安は無く、地元の人たちの優しさもあってすぐに溶け込むことが出来た。蘭越の良いところについて聞いてみると、「人口は約５０００人。顔が見える人数で、何かをやるにも個性豊かな地元の方もかかわって下さる。多くも少なくもなくちょうどよい。」と答えてくれた。しかし、人口はここ２０年間で１０００人以上も減少している現状に松原氏は、「人口増加のためには情報発信が大切である」と語ってくれた。蘭越の改善すべきところについて聞いてみると、「外に目を向け、新しいことへチャレンジしていけば、蘭越はもっと発展していくはずだ。」と答え、続けて農村地帯ならではの住宅数の少なさも指摘。

「住」はすべての生活の基盤であり、ここを改善しないことには移住定住は増えないだろうと今後の課題にも言及した。司書という仕事柄、周辺地域の図書館数の少なさにも言及され、蘭越のある後志管内には図書館は小樽・余市の２館のみ。子どもの教育に欠かせない情報収集の場であり、子どもの教育にも欠かせない図書館活動をしている「花一会」を条例制定をして、名実ともに図書館にしてほしいと訴えた。蘭越について一言お願いすると、「自然も豊かで山・川・海あり温泉もあり、人も優しい。可能性が沢山ある町。」と語ってくれた。たくさんの人が蘭越に来て、図書館が発展していけば、これ以上の喜びはない。

最後にインタビューしたのは学校教員である渡辺豪氏。教師として後志周辺で転勤を繰り返し、後志管内ならどこからでも通えるような土地で暮らしたいと思い、ニセコで土地を探したが空きがなく、知人の不動産屋に相談したところ蘭越を勧められたという。細かい条件も合い、まだ就学中の子供がいる状況から、福祉の充実にも惹かれたようだ。他の市町村にはあまり見ることができないが、蘭越には就学中の学生には高校３年生まで医療費無料となる制度があり、手厚い保障は決め手となったようで、その後町が斡旋した定住促進地域に移住したため町内には同じように移住者が多く、学校の PTA での交流もあり、さらに職業柄転勤には慣れているということもあって馴染むまでに特別な苦労は無かったそうだ。

移住定住についての考えを質問すると「潜在的に移住したがっている人は結構いると思いますよ」と話し、「今の住宅に入る前に、蘭越の奥にある富岡という場所に家を買っていたのですが、息子が学校に通えないほど遠いということで、定住促進地に引

っ越してきたんです。そこで、二軒家を所有しているのは大変なので売り家として出していたのですが、「蘭越に住みたいが空家が無いので、賃貸住宅として住まわせてくれないか」という問い合わせが数件あった」と移住時のエピソードを交え、住居可能な物件の少なさを指摘し、「より町が率先して住居を増やしていくことが大事なのではないか」と述べた。

さらに、移住定住を進めていくには移住希望者の方が物件を探しやすいネットワークの確立を挙げ、「役場や不動産の間に誰かが相談役として話を聞き、希望を聞いてより細やかな対応を目指していけるよう、僕たち移住定住ネットのメンバーがボランティアで相談役を引き受けたり、などの移住希望者の方が混乱しないようなネットワークがあれば移住定住しやすくなるのではないか。」と、今後の具体的な改善策を明かしてくれた。

この６人とのインタビューの中で複数人が課題として挙げた「住居数の増化」、「情報発信戦略の見直し」、「雇用の拡大」はおそらくこの６人だけでなく、移住定住ネットに登録しているような方々ならきっと課題として捉え意識しているところであると思うが、そういった共通意識をメンバーだけでなく町民全体が持ち、その課題に対しての自分の考えを町全体で議論していく場が必要ではないかと今回のインタビューを終え、感じました。町民に「この町はいいとこだけど、ここは直したほうがいいよなぁ」と考えさせ、その意見をぶつけ合い解決策に近づけていく場を提供する役割を移住定住ネットには担っていただくことが理想ではないかと思います。

インタビューに受け答えてくださった方々は自分のような未熟な若者の質問にも快く受け応えて下さり、この町についての思いをお聞きしていましたが、皆この町の長所・短所がよく見えているとも感じ、全員が確固とした意見をお持ちでした。町議員である熊谷氏がおっしゃるには、町を変えるのはどんな時も

「馬鹿者、よそ者、若者」の方々で、新たな価値感が町の活性化には不可欠だ、と。この言葉の裏には、よそ者の方が町を余計な感情なしに客観的に分析できるからだと聞いたときは自分なりに解釈していました。しかしこの取材を終えた今、それとはなんとなく違うなという思いがあり、かなり抽象的な表現となってしまいますが、移住定住をする方々はその際に自分で数ある中からこの町を「選ぶ」という行為を経ているのが、生まれも育ちも蘭越町の方々との決定的な違いであります。この選ぶ行為によって生まれるその選んだ町に対しての一種の責任感か、いわゆる恩返しのようなものかは解りませんがある種特別な「想い」が、町のさらなる活性化につながっていく可能性があるのではないか、と、勝手ながらに感じることができた経験でした。

蘭越町課題解決への道筋～移住定住ネットとは～

2014 年 3 月 1 日　初版発行

発行：諸橋祥・高橋尚大

出版：らんこし作家デビュー・プロジェクト